悪霊　第六部・貧民窟の聖女（マリア）

【登場人物】

伊集院満枝……………………北海道Ｈ市の地主の娘。川奈産業の大株主
安西小百合……………………満枝とはＩ高等女学校の一年後輩。夫を上海で亡くす。
猪俣佐和子……………………党員。党の名前は井上。伊集院満枝の元クラスメイト
李麗姫…………………………元女性抗日パルチザン。満枝の仲間になる
佳代……………………………貧しい農家の娘。党のハウスキーパー
金沢文子………………………安藤の養女
海老沼千恵子…………………家出した資産家の娘。佐和子の配下となる
篠原ヨシ………………………伊集院家の使用人
小沼健吾………………………元伊集院家の小作人。
安西健吉………………………小百合の兄
安西信子………………………小百合の母
増田喬…………………………小百合の夫。川奈産業社員。上海で事故死
磯田アヤノ……………………小百合の叔母。華道の師範
磯田幸吉………………………小百合の叔母の夫。高等小学校教師
磯田悦子………………………東京に家出して小百合に救われ、磯田夫妻の養女になる
老人……………………………右翼の大物
黒木……………………………小沼と同じ国家主義団体のメンバー
大橋多喜蔵……………………プロレタリア作家。党員。佳代と同居する。

三沢……………………………党中央委員。特高警察のスパイ
手塚……………………………「党」の戦闘的技術団メンバー。佐和子の直属の上司
安藤浄海………………………元左翼の弁護士貧民街の僧
朴正烈…………………………朝鮮人青年
曽根……………………………党員

【時・場所】

昭和七年（一九三二）五月〜八月。北海道Ｈ市、青森県弘前市、東京市、熱海

I

この人と……。

広い畳敷きの部屋の真ん中に、ぽつんと置かれた骨壺を見ながら、小百合は呟いた。

一緒に過ごしたのは、結局幾日だったのかしら……。

仏壇を前に、黒い衣服を着けた男女が九人、座っていた。

小百合の夫であった増田喬の両親とその弟妹。小百合の両親と兄。そして、喬の遺骨を運んできた川奈産業大連支店に勤める中年男と青年。

「息子があんな不始末をしでかして、ご迷惑をおかけしたというのに、わざわざお手間を取らせまして……」

喬の父、すなわち小百合の義父は、わずかに声音を振るわせつつ、畳に手をついて、川奈産業の二人に頭を下げた。

「まことに、かたじけなく存じます」

「いやいや……」

眼鏡をかけた中年男は、手で制しつつ言った。

「増田君は社業のさなかに不慮の最期を遂げられたんですから、このくらいは当然のことです」

その言葉に、義父母と義弟は、それぞれの仕草で恐縮している態を示した。

昭和七年一月、支那軍と日本軍との間に起こった大規模な軍事衝突——上海事変の直前に水死

した増田喬の遺骨が、北海道H市にある彼の実家に運ばれてきたのは、三月に入ってからだった。

新聞は連日、清朝最後の皇帝であった溥儀を首班とする独立国家・満州国の建国の模様を伝えている。新しく首都となり名を新京と改めた旧・長春、大連、奉天、旅順などの大都市では盛大な記念式典が目白押しであった。

各国の利権が錯綜する上海で騒ぎを起こし、欧米の耳目をそこに引きつけておいた上で、満州での新国家建設を押し進めようという関東軍の目論見が当たった形となった。

そのさなかにあって、泥酔した挙げ句に川に落ちて溺死した一青年のことを伝える新聞はひとつもなかった。

さ、さ、こちらへ。

義父が、川奈産業の社員たちを別室に招く声をぼんやりと聞いていた小百合は、隣に座っていた実母に袖を引かれ、慌てて立ち上がった。

これから、社員たちを酒食でもてなさねばならない。安西、増田両家の女たちは、台所に用意してある酒肴を運ぶ役目だった。

「小百合……」

実母の信子が、箱膳に刺身の載った皿を並べていた小百合にそっと囁いた。

「無理をしなくてもいいんだよ。ここは、お母さんがやっとくから」

小百合は気遣わしげな母を見つめた。夫の「無言の帰国」はさぞ辛かろう、ぼんやりして粗相があってはお客様に失礼だから休んでいていいよ、という意味のようだった。その母の肩越しに、硬い面差しで七輪の前に俯き、お燗をしている義母の姿が眼に写った。さらにその後

ろでは、喬の妹がこちらに背を向けて菜を刻んでいる。

「いいの、大丈夫」

自ら発した声が、まるで他人のもののように耳の中で響いた。

皿を並べ終え、箱膳を長手盆に載せて持ち上げ、台所から座敷に向かった。襖を開けようとすると、すでに酒が回った男たちの声が響いてきた。

「いやいや、上海はいまだ戦火のただ中、支那官憲に遺骨の引き渡しを交渉するのは、ずいぶん骨が折れましたよ」

川奈産業の中年社員の声だった。

「軍の方面や、親日的な支那人にかけあって、やっと引き取ることができたような始末で。こうしてご遺族のもとにお持ちすることができて、一安心です」

小百合の脳裏に、伊集院満枝の白い貌が浮かび上がった。

夫から送られてきた手紙によれば、大陸における川奈産業の成功は、伊集院満枝が自力で築き上げた人脈あってのことらしい。おそらく、夫の遺骨を回収できたのも、満枝の尽力であって、眼鏡をかけた中年社員らは彼女の指示に従って動いたにすぎないのだろう。

そう思うと、わき上がってきたのは、感謝の念ではなかった。

恐怖と憎悪だった。

満枝さんが、夫を満州に呼ばなければ、こんなことにはならなかったのだ。襖にかけた手が細かく震え始めた。

上海はいまだ戦火のただ中にあり、その知らせは新聞で逐一伝わってくる。大規模な戦争であ

ることは、小百合にも理解できた。そんな地で死んだ夫の遺骨を日本に持ち帰るのは大変だっただろう。それを、満枝はやりとげた。そのことが小百合には腹立たしかった。

なぜ満枝は、そこまで私に関わろうとするのだろう。

わざわざ、支那の革命家の文書を読ませたり、夫となる人を自らが経営に参加している会社に採用したり、満州に呼び寄せたり……。挙げ句の果てに夫は異国で死んだ。

まるで自分の人生を満枝に弄ばれているよう……。

酒を酌み交わす男たちの前に箱膳を並べ、お悔やみを述べる川奈産業社員たちに頭を下げ、台所に戻った小百合の耳に、義母と義妹の囁き声が入ってきた。

「まったく何を考えているんだか」

「涙ひとつ見せないしねえ」

小百合は狼狽えた。その通りだった。夫の訃報に接してから、小百合は一度も泣いていない。

最初、夫の訃報に接して小百合は呟いた。そういえば、喬さんはどんな顔立ちだったっけ……。

小百合が増田喬と結婚したのは一昨年の十一月。喬が満州に旅立ったのは昨年の三月。ともに過ごしたのは四ヶ月にすぎない。それから一年、小百合は夫と離れたままだった。遺骨を見れば夫の顔を思い出すかもしれないと思ったが、大柄だった生前の喬とくらべて、骨壺はあまりに小さかった。

数日後、小百合は実家に帰った。

「お帰り」

父と兄は出社していて、独り家にいた母・信子が出迎えてくれた。

「荷物が届いているわよ」
その前日、小百合は、夫と短い新婚生活を送ったH市内のアパートを引き払った。家財道具は処分したり、増田の家に送ったが、一部は小百合のものとして実家に運んでもらったのである。
その日の夜、小百合は久しぶりに父母や兄と夕食をとった。
「それで、お前は今後、どうするんだね」
食事の最中、父が問うた。咄嗟に返事もできない小百合を気遣うように、父は続けた。
「まあ、当分はうちでのんびりするがいい。ゆっくり考えるんだな」
夜が更け、小百合は懐かしい三畳の自室で寝た。すでに母が布団を敷いてくれていた。その布団が、夫と初夜を迎えた時に使ったものだと気づいた。暖かく、力強い抱擁がからだの裡で蘇ってきた。悲しみが一気に噴き上がってきた。小百合は、声をあげて泣いた。あたりはばかることなく泣き、泣き声に気づいて入ってきた母に抱きしめられながら、子どものように泣き続けた。

夫の遺骨を迎えてから二ヶ月が過ぎたある日の午後。
小百合は、青森県弘前に住む叔母の磯田アヤノの家の縁側に座って、届いたばかりの夕刊を広げていた。
停戦なる。
一面に大きく見出しが出ていた。日本と支那、両国の軍民合わせて四万の死傷者を出した上海事変が終結したのである。
小百合は新聞を畳んでマガジンラックにおさめ、庭を見やった。緑に萌える生け垣の向こうに

五月晴れの青空が広がっている。
ここがいちばん、落ち着くなあ……。
小百合は大きく伸びをして、呟いた。
葬儀が終わった後、小百合は増田の戸籍から離れて元の安西姓に戻った。葬儀のさなか、義母が弔問客に、あの嫁のせいですよ、と訴える声を聞いてしまったからである。
喬はね、あの嫁に何度も、満州に来いって言っていたそうですよ。それなのに、一度も行こうとはせず、青森の親戚の家で遊んでたんですから。せめて嫁がついてやっていれば、酔っぱらって川に落ちたなんてみっともない死に方をせずにすんだはずなんですよ……。
小百合はいたたまれなくなった。確かに義母の言うとおりだ。私がついていれば、あんなことには……。小百合は、増田家から除籍したいと申し出た。義父母はとくに引き留めず、小百合は安西姓に戻った。実家に帰り、暗く沈みこんだまま一ヶ月がすぎた時、一通の手紙が届いた。差出人を見ると、「磯田悦子」とある。
悦っちゃん……？
急いで封を切ると、こんなことが書かれていた。
小百合姉さん、お元気ですか？
このあいだ、わたしは磯田さんの家の子どもになりました。幸吉さんとアヤノさんが、お父さんに話をつけてくれて、わたしは磯田さんの養子になることができたんです。今、わたしは磯田さんのおうちから、小学校に通ってます。もう、昔の悦子じゃありません。いっしょうけんめい勉強しています。成績があがったら、高等女学校に入れてくれると、磯田のお父さんお母さんが

おっしゃってくださいました。わたしは、いっしょうけんめい勉強して、高等女学校を出て、小百合姉さんみたいな女のひとになりたいです。いちど、遊びに来てください。

たどたどしい字で書かれた便箋を読みながら、涙がこみあげてきた。

よかった……。

浅草の与太者から受けた性行為と暴力に深く傷つき、小百合を含め誰とも口をきこうとしなかった悦子が、今では毎日学校に通い、熱心に勉強しているという。

悦子に会いたくなった。小百合は、連絡船に乗って青森に行き、電車で弘前に向かった。駅では、磯田夫妻に連れられた悦子が出迎えてくれた。

小百合姉ちゃん！

ホームに降り立った小百合に、悦子は満面の笑みで手を振り、駆け寄ってきた。髪の毛をきちんと三つ編みにし、こざっぱりとした洋服を着た悦子には、かつての不良少女時代の面影はなかった。

最初は数日過ごすだけの予定だったが、悦子は、小百合が北海道に帰ることを嫌がった。磯田夫妻も、何時までもここにいていいのよ、と言ってくれた。つい、ずるずると今日まで厄介になったのである。

でも……。

端午（たんご）の節句も近く、青空には鯉のぼりが泳いでいた。磯田夫妻は仕事で出かけ、悦子はそろそろ学校から戻ってくる時間だった。

何時までも厄介にはなっていられない。

一昨日、実家から手紙が来た。小百合の境遇を哀れみ、縁談を申し入れてきたひとがいる旨が書かれていた。当時、夫を亡くした女が生きていける場は少ない。再婚が最良の道とされていたが、小百合はそんな気にはなれなかった。いまだに夜、布団に入ると夫の夢を見る。夫の抱擁を思い浮かべながら自慰に耽ることも少なくない。夫以外の誰かに抱かれるなど、思いもよらなかった。

もし興味があるんだったら……。師範の免状を持つアヤノから、華道の修業を勧められたこともある。師範の免許があれば、弟子をとって生計を立てることもできるから、と言われたが、生来、手先の不器用な小百合には、現実味が感じられなかった。

「ただいま」

物思いに沈んでいた小百合の耳に、玄関から悦子の声が飛び込んできた。廊下を走って居間に入ってくる。お帰り、と立ち上がると、紺色のセーラー服にランドセルを背負った悦子は、お客さんだよ、と言った。

「お客様？」

「うん」

悦子は白い歯を見せて笑いながら言った。

「女のひとよ」

来た……。

胸騒ぎがこみ上げてきた。膝が細かく震え始めた。

何時かは来る。そんな予感はしていた。夫の葬儀のために北海道に帰って以来、いつ彼女が現

れるか、落ち着かない日々だった。だが、まさか弘前に現れるとは思ってもいなかった。なぜ、ここが分かったのだろう？　逃げ場がなくなった……。

「小百合姉ちゃん」

瞬(まばた)きもせず虚空に眼差しを彷徨(さまよ)わせる小百合に、悦子が首を傾げて問うた。

「お客さん、どうするの？」

お座敷に……お座布団とお茶を用意して差し上げて。しわがれ声でそう返すのがやっとだった。

視界が真っ白になりそうなのを堪(こら)えて、玄関に出た。

地味な黒っぽい和装の女性が立っていた。伊集院満枝ではなかった。

年は三十をすぎたくらいか。整った、しかし、どこか険(けん)のある面差しをしていた。小百合を見るなり深々(ふかぶか)と頭を下げて言った。

「伊集院満枝の使用人、篠原(しのはら)と申します」

かつて伊集院家の小作人だった少女時代、伊集院太吉や友人たちに犯され、その後、満枝の助力を得て復讐を果たした篠原ヨシは、今では、川奈産業の仕事で忙しい満枝にかわって伊集院家の土地を取り仕切る役目についていたが、むろん、小百合がそのことを知る由(よし)もない。

「本来ならば、お嬢様自らお伺いせねばならぬのでしょうけれど……」

座敷に通された篠原ヨシは、眼を伏せて静かに言った。

「大陸での仕事に追われ、葬儀にも列席できず、まことに非礼であったと申しておりました」

「はい……」

「これは」

ヨシは手にしていた風呂敷包から袱紗(ふくさ)に包んだ薄いものを取り出し、小百合の前に置いた。

「お嬢様の志(こころざし)です。ぜひ、お受け取りいただきたく持参いたしました」

袱紗を広げると、出てきたのは小切手だった。振出人は伊集院満枝個人。金額を書き込むべきところは空欄だった。好きなだけお金を引き出してくれ、ということらしい。

からだじゅうを満たしていた不安と怯えは消え、代わって怒りがこみあげてきた。怒りというよりも、苛立(いらだ)ちであった。

わたくしのことは放っておいて……。そう叫びたかった。

「失礼ながら……」

顔をあげ、訝(いぶか)しげな面差しのヨシに小切手を押し戻し、重ねて言った。

「いただくわけにはまいりません」

「しかし……」

口を開いたヨシを小百合は手をあげて遮(さえぎ)った。

「わたくしは、もはや増田の家とも川奈産業とも関わりはございません。姓も安西に戻しました」

「ですからこれは、お嬢様の気持ちです」

ヨシは言った。

「お嬢様は、とても悔やんでおられるのです。増田様を満州にお連れしなければ、あなた様を悲しませることはなかったのに、と……」

沈痛なヨシの面差しから、それが嘘ではないであろうことは窺えた。窺えはしても、そのことで凍った心が溶かされるわけではない。黙したままの小百合に、ヨシは言葉を重ねた。

「会社からの退職金、慶弔金等は、すべて増田さんの家に譲り、あなたご自身は何も受け取らなかったと伺いました」

「………」

「もちろん、お金で解決できることではないと存じております。しかしながら、あなた様の今後の生活になんとかお役に立ちたいと願うお嬢様の気持ちも、どうぞ、お汲みくださいまし」

畳に手をついて頭を下げるヨシに、小百合は言った。

「ここで受け取らなくては、あなたの顔が立たなくなりますわね」

わかりました、と小百合は小切手を懐に収めた。

「ただし、お金をいただくか、それとも破り捨てるかは、わたくしが決めます。それで、よろしいですね」

篠原ヨシは何か言いたげに小百合を見つめていたが、やがて、よろしゅうございますと一礼し、去っていった。

その日の夜。

小百合は、悦子と同じ四畳半の部屋で寝ることになっている。布団を並べて敷いた後も、悦子は机に向かって勉強を続けていた。

「ご精が出るわね」

寝衣に着替えた小百合が、髪をおろして櫛で梳きながら声をかけると、こくりと頷くのみで鉛筆を動かし続ける。微笑して布団に入り、地元の図書館で借りてきた雑誌を開けた。

読みかけの箇所に挟んだ付箋を抜いてページをめくると、ある女流左翼作家のソ連訪問記だった。モスクワの孤児院を訪問した様子が描かれている。

……ソビエト連邦には「子供の家」というのがあって、十八になって一人前の働き手になるまで世話をしてくれます。今から十四年前、ソビエト連邦が革命をやった時、沢山の労働者・農民の闘士が赤色戦線でたおれ、孤児がウンとできました。そういう孤児を、ソビエト連邦では立派な働き手として育てるために多くの費用をかけて国家で「子供の家」を組織したのです。「子供の家」にもいろんな種類ができて、日本でいう不良少年のような浮浪児を教育する「子供の家」と孤児の「子供の家」とは別になっているのです。

以下、訪れた「子どもの家」を賛美する文章が続いた後、翻って日本の現状が批判される。

……日本のブルジョアの子は、学校の行きかえりにさえ自動車にのり、好きな犬までそばへつけてヌクヌクと育っているのに、プロレタリアや農民の子はどうです。親があったって、親は搾られ、ろくな飯さえ食えずにいる。

……まして、孤児院とでもなったらそこにいる子どもは、子供達のかせぎで孤児院経営者の一家を食わしている有様です。孤児院ですがと、押し売りに来る子供の声と恰好は、ブルジョア家族制度の悪のかたまりです。

……日本人は、親子の情にあついのが世界の誇りだとブルジョアは云いますが、それは金のある親と子の間でだけ通用する。いくら可哀想と思い血の涙をこぼしても、金を出さなければ医者

のよべないブルジョア社会で、一文なしならどうしましょう。親の貧乏なのはその子の不仕合わせ。両親を失ったのは不運ときめて、冷ややかなものです。
　小百合は、黙々と勉強を続ける悦子の背中を見やった。悦子は幸い、子どものいない磯田夫婦の養子となることができた。だが、浅草には数多くの悦子のような子どもたちが、悪い大人たちの犠牲になっているのだ。
　ふと、悦子のからだが前のめりに崩れた。
「悦っちゃん？」
　声をかけたが返事がない。布団から這（は）い出して覗（のぞ）き込むと、悦子は鉛筆を握りしめたまま、机にほっぺたを押しつけて寝息をたてていた。
　時計を見た。夜十時を過ぎている。晩ご飯が終わるとすぐ、悦子は机に向かった。どうしても高等女学校に入るのだと張り切っている。
　よかったね、悦っちゃん……。
　小百合は微笑み、悦子の肩をそっと揺すぶった。悦子は薄く眼を開けると、そのまま自分の布団に潜り込み、再び寝息をたてはじめた。
　雑誌を閉じて電気を消し、小百合も布団に入った。

　助けて！
　小さな悲鳴に、小百合は跳ね起きた。傍らを見ると、悦子は布団を抱きしめ、細かく震えている。どうしたの？　そっと呼びかけると、悦子は布団を蹴飛ばして、小百合に抱きついてきた。

「怖い……」
　小百合の肩に顔をおしつけ、夢中でしがみついてくる悦子に、小百合は困惑しつつ、その耳元で問うた。
「いやな夢でも見たの？」
　悦子は小さく頷いた。
「大丈夫よ……お姉ちゃんがついてるから、安心してお休みなさい」
　悦子は激しく首を振り、言った。
「寝たくない」
「どうして？」
「寝ると……あいつが出てくるから」
「え……？」
「あいつが、あたしを殴る……あいつが、嫌なことを……」
　その言葉に、小百合は胸を締め付けられた。明るく振る舞っていた悦子だが、やはり五郎から受けた仕打ちを忘れられたわけではないのだ。
「大丈夫よ」
　小百合はきつく悦子を抱きしめた。
「悦っちゃんはもう大丈夫。悪い奴は……」
　もういないんだから、と口にしようとして止めた。与太者の五郎が死体で発見されたことは、小百合も新聞で読んで知っていた。死因は明確に書かれていなかったが、おそらく、猪俣佐和子（いのまたさわこ）

に睾丸を踏み潰されたのが致命傷だったのだろう。小百合はそれを目撃し、誰にも明かしていない。すぐ傍にいた悦子とも、そのことを語り合ったことはない。

「知ってる……」

悦子が顔をあげた。肩で息をしていたが、窓から漏れる月明かりにあおく照らし出されたその面差しは、落ち着きを取り戻していた。

「あの女のひとが、あいつのきんたまを踏み潰したんでしょう？」

やはり見ていたのか……。小百合は何も言えず、悦子を見つめるばかりだった。悦子は眼を伏せて言った。

「もう大丈夫……分かってるんだけど、時々、あいつと一緒にいた時のことを思い出しちゃって、すごく怖くなって……もう大丈夫だってことは分かってるのに……学校でも、授業中にちょっとしたことで思い出しちゃって、叫びたくなっちゃって……忘れたくても、だめなの……」

悦子は再び、小百合の肩に顔を押しつけた。

「小百合姉ちゃん」

「なあに？」

「あたしから、離れないでね」

「…………」

「ずっとここにいて……お願い」